



<VOL160.2021.4>



もりおかクラブ事務所：〒020-0021 盛岡市中央通3-7-18 ラ・パルク中央 1階 Tel 019-623-1575 盛岡YMCA内  
盛岡YMCA HP <http://www.ymcajapan.org/morioka/> 検索エンジンワード「盛岡YMCA」

「主題」

「価値観、エクステンション、リーダーシップ」

「変化をもたらそう」

「変化をたのしもう！」

「変化を楽しみながら新生北東部を創ろう！」

「暗雲をふりはらえ、きっと未来は明るい」

国際会長	Jacob Kristensen (デンマーク)
アジア太平洋地域会長	David Lua (シンガポール)
東日本区理事	板村 哲也 (東京武蔵野多摩)
北東部長	南澤 一右 (仙台青葉城)
もりおかクラブ会長	長岡 正彦

今月の聖句 コヘレトの言葉、11章4節より

「風向きを気にする人は種を蒔けない。雲行きを気にすれば刈り入れはできない。」

会長	長岡 正彦
副会長	山口 貴伸
書記	濱塚 有史
会計	大関 靖二
担当主事	中村 渉 (チャン)
メネット	井上 優子

令和3年5月定例会  
日時、場所 5月8日(土曜日)、18時30分より、500円  
盛岡劇場河南公民館研修室  
卓話を予定しております。

第二例会 5月22日(土曜日)、18時30分より  
駅前居酒屋じよ居

会長巻頭挨拶



長岡会長

みなさまこんにちは、都市圏に3回目の非常事態宣言が発出されました。苦しみはいかばかりかと心が痛みます。なんとか乗り切っていきましょう。いつまでもコロナの災いが続くわけはありません。暗雲を振り払い、明るい未来へ向かいましょう。

盛岡の気候は、例年になく早い春を迎え、

早い春も、花が一度に咲くんだと、こんなこともあるのだと感じております。こぶしと、桜と、雪柳、ぼけが一緒に咲いています。今月は花のブリテンに仕上げたいと考えております。

私事になりますが、4月12日、出勤中に自転車で転倒、右胸を強く打ち、肋骨骨折になりました。1週間苦しみ今週からは何とか日常生活に支障が出ないまでに回復しました。家族からは「いつまで若いと思っているのですか。」手厳しいお言葉をいただきおおいに反省している4月末です。

4月定例会のご報告

4月10日、18時30分～20時30分、盛岡劇場河南公民館研修室。出席者、長岡、大関、千葉、シンティア・ラザロ、濱塚、中村(敬称略)。ゲスト、宮澤秋彦さん(シュリンプ)、渡邊拓人さん(しなちく)、野呂文香さん(かまめし)、以上9名の参加で開催いたしました。今月のメインイベントはシンティアさんの入会式です。北東部長の訪問依頼を見送ったため、前会長の大関さんに立会人をお願いいたしました。ようこそシンティアさん心から歓迎いたします。そしておめでとうございます。ボランティア精神が体中から溢れているあなたは、きっと私たちの良いお手本になってくれるでしょう、クラブ内外での活動にどうぞ私たちの力をお使ください。楽しみです。

食事のお弁当を準備しましたが、完全黙食です。なんと異様な雰囲気でしょう、こんな食事では意味がありませんので、来月からは例会での食事は無しにしましょうと、濱塚メンから提案があり同意できましたので、食事なしの例会にします。ワクチンがみんなに行きわたるのを心待ちにしています。



ようこそシンディさんよろしくお願ひいたします。



すこし寂しいですが、4月例会お疲れさまでした。

### もりおかクラブの状況報告

4月の出席率	5/14	36 %	ゲスト3名	ビジター0名	メネット	0名		
メーキャップ	0名			4月の切手	0g	累計	498g	
4月のにこにこ	0円	累計	円	焼きそば	0円	累計	42,000円	
4月の石鹸	0円	累計	0円	りんご	0円	累計	0円	
4月の献金	0円			ファンド合計	0円			

会費の納入をお願いいたします。岩手銀行 松園支店(店番号 082)普通口座 2145674

もりおかワイズメンズクラブ 会計 大関 靖二

4月のハッピーバースディ 4/8 三田庸平さん 4/11 濱塚真美メネット 4/16 山口律子メネット  
お誕生日おめでとうございます。

### ワイズメンズクラブの皆様

盛岡YMCA総主事 濱塚有史

盛岡 YMCA 宮古ボランティアセンター10年の歩みと今後の展望  
2010年3月18日に支援活動を開始して以来10年の際月が経過しました。ワイズメンズクラブの皆様におかれましては盛岡 YMCA が行う「東日本大震災被災地復興支援活動」を長きに渡りお支えいただき心より感謝申し上げます。私たちの活動はこの3月を持ちまして一旦終了致します。盛岡 YMCA と致しましては、これまでの取り組みに対してしっかりと「ふりかえり」を行い、今後新たな視点での復興支援活動に取り組んでいきたいと考えております。以下、10年の活動を簡単に報告致します。尚、詳細につきましては年度内に「宮古ボランティアセンター10年の歩み(仮題)」の発刊を予定しております。そちらをご覧くださいませと存じます。

コロナの感染拡大が止まりません。宮古での活動も昨年度は大きく制限されました。皆様方のご健康が守られますよう遠く岩手の地よりお祈りしております。

#### ■ 2011年度

3月18日 日本キリスト教団宮古教会の協力により、復興支援活動を開始しました。当初の活動は瓦礫の撤去、ヘドロの除去が主な活動でした。阪神淡路大震災の際、復興支援活動に携わった佐久間真人主事が日本 YMCA 同盟から派遣され、初期の活動体制を整えて下さいました。その後大阪 YMCA OB の池田勝一さんが初代所長として、横浜 YMCA 職員の大塚英彦さんがディレクターとして着任し長期にわたる支援活動がスタートしました。

富士ワイズメンズクラブから軽トラック、滋賀の長浜ワイズメンズクラブからは4WD のワゴン車が寄贈され避難所、仮設住宅でのレクリエーション、焼きそば等のお振舞を積極的に展開していく

ことが出来ました。

#### ■ 2012年度

横浜 YMCA から大谷昭雄さんが所長として大阪 YMCA から木田泰之さんが副所長として着任しました。広島 YMCA からの大口の寄付により7月には宮古教会の隣地を賃借し2階建てのセンターをプレハブで建設しました。建設にあたっては、宇都宮東クラブの岡田さん、もりおかワイズメンズクラブの大関さんのご尽力により立派な施設が短期間で完成しました。2年目の活動は、仮設住宅でのお振舞に加え、地域のお祭り、イベントへの積極的な参加を行いました。また、仮設住宅への引っ越しの手伝い、草刈り等新たな活動も加わってきました。

#### ■ 2013年度

木田泰之さんが所長となり、仙台 YMCA から斎藤勉さんが副所長として着任しました。ヘドロの除去や、瓦礫の撤去、仮設住宅でのお振舞といった活動から「宮古を愛する子どもたちの育成事業」として未来を担う子どもたちの育成にその活動の重点を移していきました。具体的には、毎月の野外活動「アドベンチャークラブ」の開催、週1回のサッカー教室を宮古小学校校庭で行いました。また、夏休み中津軽石小学校での「短期集中水泳教室」など、通常 YMCA が行っている活動を宮古でも積極的に展開していきました。

#### ■ 2014年度

木田泰之所長が帰任し、斎藤勉さんが所長となりました。この年よりボランティアセンターは常勤が一人体制をなりました。マンパワーが減少する中、地元のボランティアの皆さん、被災地にクライマーを派遣する会の皆さんからのサポートにより、前年と同様の支援活動を展開することが出来ました。閉伊川大学校、東京海洋大学とコラボした「ヤマメの採卵体験」など森、川、海に恵まれた宮古の地域を生かしたプログラムを実施することが出

来ました。

### ■ 2015年度

斎藤勉所長が仙台 Y に帰任し、宮古ボランティアセンターはスタッフレスとなりました。盛岡 Y から通いもしくは、プログラムの前日宿泊で、復興支援活動を継続していきました。また、宮古ボランティアセンターの土地所有者が土地の売却を決定したため、ボランティアセンターを移転することとなり、2年間使用したプレハブのボランティアセンターは解体することとなりました。資材は、鉾ヶ崎地区で被災した七滝湯のオーナーに寄贈しました。新センターの移転先は市内田の神地区で、同じく移転計画中の宮古教会のすぐそばになりました。宮古を愛する子どもたちの育成事業と並行して、高校生ボランティアの育成に力を入れた1年となりました。

### ■ 2016年度

8月30日、岩手県沿岸を襲った台風10号の被害で宮古市中心部は大規模な水害に見舞われ、約1,300名の避難者が発生しました。宮古市は激甚災害地域に指定されました。盛岡YMCAは、① 9月3日～4日 ② 9月11日～12日とワークキャンプを開催し、ヘドロの除去等作業を行いました。盛岡YMCAの職員、学生リーダー、被災地にクライマーを送る会が集結し、震災当初と同じ作業を行いました。また、学生YMCAと盛岡YMCAのリーダーの交流を宮古を通して行い、学Yリーダーの共同企画によるプログラムを開催しました。

### ■ 2017年度

サッカースクール、野外活動を中心に盛岡からスタッフ、リーダーが通う形で、支援活動を継続しました。目標としていた10年間の活動継続を実現するため、経費の節約を図り田の神の宮古ボランティアセンターの閉鎖を行いました。これ以降、完全に盛岡からの通いによるプログラムの継続に移行することとなりました。

### ■ 2018年度

5月、6月の野外活動を終え、8月のサマーキャンプの開催を

準備する中で、YMCA のキャンプが旅行業法違反に該当するとの指摘があり、宮古市からの教育委員の名義後援の申請が難しくなりました。震災復興支援活動は、毎週火曜日のサッカースクールに限定されるようになりました。

### ■ 2019年度

盛岡YMCAは旅行業登録を行い、宮古においてサマーキャンプを開催することが出来ました。しかし、盛岡YMCAのマンパワーの不足もあり、毎月の野外活動は、行うことが出来ず、サッカースクール中心の活動となりました。

### ■ 2020年度

閉伊川大学校、東京海洋大学等のコラボでの環境学習を目的としたキャンプの開催を準備をしていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大のため、開催ができなくなりました。こうした中でも毎週火曜日に開催しているサッカースクールは年間を通して継続することができました。



### ■ 今後の方向性

台風、旅行業の問題、新型コロナウイルスと後半は野外活動の機会が減少したことは残念でしたが、宮古での活動を通して確実にボランティアも育っています。また、この10年間の活動を通して確実に種を蒔くことができたと考えています。今年リーダーになった岩手大学1年生のりんりんリーダーは、宮古市津軽石地区の出身です。小学校時代、盛岡YMCA宮古ボランティアセンターが主催したスキーキャンプに参加した経験があるそうです。

当時のリーダーの名前も覚えていました。長い年月の活動の中でボランティアの皆さんを始め、歴代所長、スタッフが蒔いた種が芽生えてきています。

今後は地元の団体と共同した野外活動や、沿岸教職員を対象とした教育相談会、ふくしまスタディツアーなど、細く長く活動を継続していければと考えております。10年間ご支援ありがとうございました。また、これからもよろしくお願い致します。

首まで達し、全員で手を繋ぎ小さくまとまって水位が下がるのを祈っていたと聞きます。どんなに恐ろしかったことでしょう。でも助かりました。ここでは「てんでんこ」ではなく、みんなで力を合わせました。

盛岡YMCA出身の先生はつよぼんの同期であと5人います。合わせて6人のリーダーたちが先生として社会人となりました。こんなに多くの先生を輩出するのは初めてで、過去に教員になったOBと合わせると、20人くらいにはなるでしょうか。どの子も「君だったら良い先生になれるよ」と送り出してきました。つよぼんと仲間の新米先生、子供たちをよろしくお願いいたします。自分がよければ、その他は関係ないなどという

核家族の中で育ってきた子供たちに、一人では生きていけないことを教えて下さい。



## 教訓を、教壇から。「当時の経験伝える」

### 3月盛岡YMCAリーダーを卒業、千葉文彦さん(つよぼん)

岩手日報4月1日付けに、上記タイトルの新採用教員の「つよぼん」が特集され大きな記事で掲載されました。「つよぼん」は大船渡市赤崎町出身です。4月より煙山小学校で先生の第一歩を踏み出します。小学校6年のとき東日本大震災を経験、命を救ってくれた教員に憧れ、同じ道を目指してきました。「経験を伝え、子供たちの成長に寄り添いたい。」命を守る行動の大切さを次世代に伝えて行きます。

赤崎町は大船渡のシンボル、セメント工場の高い煙突がそびえる場所です。つよぼんは家族と高台に避難して無事でしたが、学校に残った子供たちは避難所指定の高台に先生と共に避難しました。押し寄せる津波の水位は足



## 東日本大震災から10年、企画第三弾 高知県黒潮町の取り組み

高知県西南部に位置する太平洋沿いの町、黒潮町。風光明媚でカツオの一本釣りが盛んなこの町は、東日本大震災から1年後の2012年、大きな課題を突きつけられた。内閣府が公表した南海トラフ巨大地震被害想定で、“日本で最も高い津波が来る町”とされました。その最大津波高は34.4m。この衝撃的な数字に、大きな注目を集めることになった黒潮町でしたが、それから約9年経った現在では、海外からも視察が訪れる“防災先進地”として知られるようになってい

ます。黒潮町はどのように防災に取り組んできたのでしょうか。“津波の町”として知られる以前から、当然、防災への取り組みは進めていました。東日本大震災を受けて、南海トラフ巨大地震に備える防災の新体制を作るべく、さまざまな準備を進めていたのです。2011年7月には南海地震対策推進本部を設置し、防災に特化した部署として“情報防災課”も設立しています。そこで国、県とも連携した人的ネットワークを構築して、2012年4月1日から新体制をスタートさせる予定でした。ところが、まさにその前日、内閣府から南海トラフ巨大地震の被害について新しい想定が公表されたのです。

最大津波高34.4mという数値は従来の想定を大きく上回るもので、その衝撃はかなり大きかったです。ビルの高さにしたら11階ほどですからね。正直、物理的な事象としてイメージも湧かなかつたぐらいです(笑)。そして、直感的に「これは大混乱になるだろう」「どうしようもない」と対策を諦めたり、「生活ができる町ではない」など、これまでやこれからの町の営みを否定したりする考えや発言の一切を禁止し、発言はすべて課題解決に向けたものにしようと思えました。そして、徹底するように求めたのは「住民の命を守る」ことを大原則として、すべての職員が防災の



津波防災の象徴避難タワー

当事者であると認識することです。そのうえで、この極めて困難な状況に立ち向かうため、改めて奮起を要請しました。後になって聞いてみると、「あの訓示で腹をくくった」「これから本格的な防災が始まる」といった意識を持ってくれた職員も多かったようです。

役場の約200人の職員全員を防災担当とする“職員地域担

当制”を導入し、それぞれに地区を割り当てて、住民のみなさんに町の防災方針を伝えながら累計200回以上のワークショップを開催しました。そこで避難道路や避難場所など、いわば“ハード面”での課題を洗い出していたのです。それを3~4カ月ぐらいの期間に集中して行い、上がってきたものを精査して、防災・避難インフラその整備計画を立てていきまし

そびえていると忘れません。

た。こうした防インフラの整備は実際に災害が発生しなければ意味がないと思われがちですが、私たちの実感としては決してそんなことはありませんでした。ハード面の整備は一度作ってしまえば、その存在が効果を発現し続けます。ワークショップで防災方針を伝えたり、避難計画を作ったりすることも重要ですが、やはりそれだけでは住民のみなさんについてはこないのですよ。「目に見える」ことはとても大事です。ソフト面の取り組みをやりながら、順次、目の前で防災インフラが整備されていくことで、しっかりと防災を意識するようになるのです。黒潮町の場合は、たまたまタイミングよくハード、ソフトの両軸で同時に整備が進められました。その意義は大きかったと思います。

町内に6基の避難タワーを備え、避難道路は約230本、避難場所は約150カ所を整備しました。避難タワーには、高さ22メートルと全国有数の規模となるものもあります。浸水区域にあった公共施設、保育園や消防署、役場は高台移転も行いました。

お見事です、黒潮町

### 編集後記

「子供たちをよろしく」、ビリーバンバンという兄弟グループが歌っていました。大人の思い出話では子供たちには何も伝わらない。思い出のレンズは曇ってしまっている。真っ白なキャンバスに子供自身で、体験や夢を描いて欲しい。その手助けができるのは直接子供たちと向き合う先生です。子供たちをよろしく。

と歌っています。つよぼんたちYMCA出身の先生たち、どうぞ子供たちをよろしくお願ひします。

4月27日の朝は、なんと氷点下まで気温がさがりました。車の窓が白く凍り、植物たちの新芽も凍りそうでした。日中の暖かさで何とか枯れてしまうのは免れたようです。5月2日は焼きそば販売です。今年も始まります。



青空をバックにボケの花



4月初旬スイセンに雪



雪柳満開



すべて黄色のスイセン



小さな花です



ダンデライオン雑草の王